新年度を迎えるに当たって

専務理事　中沢　重夫

昨年3月、任期途中の前執行部役員の後をうけて、役員の再編成を行い発足した現執行部でありましたが、前期役員の残任期間である昨年一年、協会運営にひずみがおきてはならないと大変苦慮したのです。が多くの皆様のご協力もあって何んとか運び、任期を終えることができました事を深く感謝し、厚くお礼を申し上げたいと思います。

本年は役員の改選期に当たり、評議員会の皆様から、昨年一年の経験をふまえて、次期もこの現執行部で引き続き頑張ってみなさいと言う心強い大変ありがたい励しの言葉をいただき、去る3月13日、新理事会を開催致しました。そして理事の皆様のご推挙によって、私が再び専務理事に就任することとなりました。身に余る光栄に存ずるとともに、その大任さを考えるとき、ほんとうに身の引き締まる思いが致します。

私と共に引き続き執行の任につく他の役員の皆様とともに、昨年の経験を生かし全力で取り組んで参りたいと思います。関係各位の方々の絶大なるご支援ご協力をお願い申し上げます。

さて今期、平成5・6年度の発足にあたり、最初に申し上げたいことは、昨年、『再編執行部のスタート』の折、また途中、『年度なかばの振り返り』でも申し上げて参りました事を、今期はより早く、強く前進させることを念頭において参りたいと思います。多くのことをバラエティにするよりも、むしろ目標を集約し、重点的にやって行きたいと思っております。

それは、

一、オリンピックに出たい。

二、みんなにハンドボールのすばらしさを知って貰いたい。

三、そしてもっと、もっと沢山のハンドボールマンが生まれて欲しい。

平成5.6年度
役員決定

財団法人日本ハンドボール協会は去る3月13日に全国理事会を開催。平成5．6年度の新役員および業務分担を次の通り決定した。

役職	氏名	担当
会長	斎藤英四郎	
副会長	立石　孝雄	
〃	米倉　功	
〃	渡辺　佳英	
専務理事	中沢　重夫	
常務理事	山下　泉	（財務、アジア大会）
〃	小西　博喜	（普及）
〃	大西　武三	（技術指導）
〃	大塚　文雄	（審判）
〃	井　薫	（強化）
〃	竹野　奉昭	（国際）
〃	木野　実	（企画、広報）
〃	植村　繁	（機関紙、特別渉外）
〃	殿水　幸雄	（日本リーグ）
理事	清水　正	
〃	金原　至	
〃	松原　忠	
〃	市原　則之	
〃	福地　賢介	
〃	佐分　正典	
監事	松本　重雄	
〃	大野　金一	
参事	中村　崇	
〃	（東北ブロック代表…4月中旬決定）	
〃	浅野　克彦	
〃	吉田　博二	
〃	楠戸　榛久	
〃	森　豊夫	
〃	北川　勇喜	
〃	真田　元	

だと思います。これは大変なことと思っています。しかしその努力は、私共役員とともに、皆様も力をかして下さい。このためにすばらしいアイデアを寄せて下さい。我々も懸命に考え、活力のある明るいハンドボール界にと、考えのまとまったものからどんどん手掛けて行きたいと思います。特に最近、若がえり、そして活性化しろと言われます。私もそうであると思います。若手起用も勿論です。若さと新しい機知に富んだアイデアと実行力も絶対必要ですが、今まで先頭を切って走られて来た豊富な経験を持たれた方々の力もぜひ欲しいと思います。年令と言うより、まだまだ若い頭をお持ちのベテランの方、これらをうまくかみ合せた組織が我々には必要でないかと考えています。また別面のことで、ハンドボール界に企業性の考え方、今日までのハンドボール界は学校社会におられる先生方の力で支えられてきた面が多かったと思われます。これを脱皮し、もっと企業的感覚を持ったものに運営をかえろと、ここ何年か論じられております。それも必要かと思われます。今まで支えて下さった方々のご努力を基盤に、より発展させるために企業的センスも富んだ運営をする必要があります。これも学校社会――企業社会各々の持ち分を充分に生かしてこそ協会運営もスムースに行くのだと思います。

今期執行部各役員は各自の分担責任分を明確にし、重点的に、そして効果的に取り組んでいただかなければ歳月に余裕はありません。

次に毎回同じことを申し上げることになりますが、日本協会の永年の課題である財源確保は、多くの諸先輩が取り組まれてきたことですが、ここでも最重要課題として、担当常務理事を中心に取り組んで参りたいと思います。

また日本協会事務局の円滑なる運営も、今まで残された大きな課題の一つです。現状の事務局がより能率的な機能と、事務局としての責任分担も明確にし、皆様のご要望に応えられる様努力していただこうと思っております。

どうぞ皆様方からのご意見をぜひお寄せ下さい。そしてご支援、ご協力を心からお願い申し上げる次第であります。

再任挨拶

財務担当常務理事に再選されて

常務理事(財務担当)　山下　泉

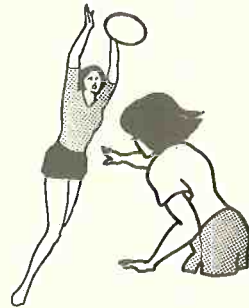
90年代に入ってのバブルの崩壊による不況は、日本協会の財政に大きな影響を与えています。先般、機関誌にて協会の財務状況を説明させて頂きましたが、現在の状況が続きますと、先輩が苦労されて長期間にわたって蓄積された基金(剰余金)を2、3年で食い潰すかも知れない状況であります。

この様な重大な時期に財務担当に再選され、その責任の重大さを痛感し、困惑しています。昨年一年は実状を把握するのに終始致しました。実行出来ませんでした。しかし、今年は意を決して、協会の将来のためにも財源確保をしなければなりません。今年から役員賛助会費の新設、協会納入業者のご理解を得て公認検定料の改定を致しました。しかし、これだけでは十分な財源とは言えません。

今後はチーム、個人の登録金の改定や日本リーグの活性化を目指し、運営方法の検討をリーグ関係者と協議しなければなりません。リーグの繁栄こそ協会発展の推進の力になると確信しています。

財政状況が厳しくても、活動を休止することは出来ません。広島アジア大会やアトランタに向け、全日本チームの強化は必須です。また、競技人口の増加や普及は、重点課題です。限られた財源を有効に活用することにより、全体を活性化しなければなりません。バレーボールやサッカーのように活発な協会は、資金的にも組織的に

も充実しています。協会役員の努力と全国会員の協力により築かれた組織です。財団法人である日本ハンドボール協会は、会員の皆様のご協力とご理解の上に運営される組織です。一朝一夕にはメジャー化は出来ません。幸にも年々競技人口、チーム数とも増加し、また小学生、中学生のチームも急増しております。微力ではありますが、精一杯の努力を致しますので、ご支援の程お願い致します。

アジア大会もあと約500日となり、大会本番に向け、全国的なPRに入ります。入場券の発売も行われる予定です。後日、誌面をお借りして詳細をご報告したいと思いますので、ご協力の程よろしくお願い致します。

最大テーマはアジア大会の成功

常務理事（強化担当）　井　薫

強化委員会を引き続き担当いたします、どうぞよろしくお願いいたします。

さて再任のこの期、強化委員会の最大テーマは「アジア大会の成功」につきると言えます。それは単に強化サイドのテーマだけではなく、日本協会の今後を左右するイベントである。そんな意識を協会、そして全国のハンドボール関係者が等しく持って迎え、これを機にマイナーを脱するきっかけにしたいものです。

大会の成功に向け、それぞれの立場での取組みが求められますが、我々の強化では開催国としてメダルの獲得は何をおいても、果たさなければならない目標だと思います。勿論ナショナルチームには、世界選手権大会、さらにオリンピックに出場、上位入賞の使命はありますし、'94アジア大会、'95世界選手権大会、'96オリンピックと、大会のスケジュールはあいつぎますが、アジア大会で勝利をつかめば、その余勢で一気に世界の舞台で真価を問える訳で、本年の強化を重要視する所以です。

勿論、強化の一貫性から言えば、このミクロ的展望は厳に慎まなければならず、ジュニアの強化は従来通りの考え方を進めてもらいますが、ナショナルには短期決戦的姿勢を強く希望したいと思います。

この大切な時期の周辺環境を眺めますと、バブル以降わが国がかつて体験した事のないような厳しい経済状況下で強化を計るのに極めて難しい現状ですが、スタッフと一緒に知恵を出し、工夫して成果を求めて行きたいと思います。

よろしくご理解と、ご協力をお願いいたします。

指導者組織の確立を

常務理事（技術・指導担当）　大西　武三

勝つがために、ハンドボールの良さをもっと引き出すために、現場では模索があり、その中から新技術や戦法が生まれます。その裏には指導者による新しいゲーム観、指導法が生まれています。

世界の技術・戦術は日進月歩であり、追いかけられている状況では決して世界の仲間入りは出来ません。

日本の指導者が温存するエネルギーは、相当なものがあります。指導者が連携し、事に対処して行けば、日本のハンドボールは飛躍の足がかりを得て行くものと思い

ます。
指導委員会の役割と事業は、底辺からトップレベルに至る指導者の手助けをすることです。日本の指導体制の一貫性は、このことなしに進めることは出来ません。そのためには、
一、公認指導者の養成。
二、指導者の研修会の開催。
三、指導補助教材の開発と提供。
等の事業が必要ですが、
四、世界や国内からの指導に関する情報の収集と研究。
も指導委員会の大きな仕事です。
以上の事業を進めるためには、指導者の連帯する組織を確立する以外にはありません。平成4年度は全国の指導者組織を確立するために、ブロックから代表として選任して頂きました。2月29日に初の全国組織としての指導委員会が開催されました。
指導者組織の確立のためには、各都道府県の指導者担当者が是非とも必要です。ブロック委員を通してお願い致しますが、主旨をご理解頂き、選任方よろしくお願い申し上げます。

審判界のいっそうの発展を

常務理事（審判担当）　大塚　文雄

最近のハンドボール界は、国際交流がめざましい。その中でレフェリー部門もB世界選手権大会・世界学生選手権大会を始め、アジアの大会にも参加するようになった。
しかし、昨年「日本のレフェリーを世界の檜舞台に」という日本ハンドボール界の悲願が、意外にあっけなく実現した。それもバルセロナ・オリンピックという、これ以上望むべくもない大舞台であった。
この事はIHFから指名された島田氏、後藤氏の努力もさることながら、何と言っても諸先輩方の汗と涙の結晶であったと、ここに改めて感謝申し上げたい。
ところで、この大舞台から帰国した両氏の報告書によれば、IHFが考え、指導していることと、日本の審判委員会の目指している方向は、まったく同じであり、日本での「良い笛」はオリンピックの舞台でも「良い笛」であった、との報告があった。
私達は、この事から自分達のレフェリングにもっと自信をもち、いっそう審判技術に磨きをかけていただきたい。
また、今後とも、外国のトップレフェリー達とも積極的に交流を持ち、一段と審判技術の向上をはかり、「反則のやり得」をさせないようクリーンでスピードとテクニックがハンドボールの戦術として生かされるようなレフェリングを心掛け、魅力的で皆を興奮させる笛が吹けるように努力をしていただきたい。
特に、本年のルール改正でゴールキーパーとコートプレヤーの区別がなくなり、1～2点差のゲーム終了直前は、大いに盛り上がることが予想されます。レフェリーが素晴らしい笛を吹くため、審判界の総力をあげて取り組みたいと考えています。
IHFの言う「ハンドボールの強い国のレフェリーはうまい。うまいレフェリーのいる国は、ハンドボールも強い」を目指して……。

情報活用のシステム化急務

常務理事（国際担当）　竹野　奉昭

昨年のバルセロナ・オリンピックの総会から、世界のハンドボール界はヨーロッパ中心から、アフリカ・アジアに変革しようとしている。そのような情勢のなか、日本のハンドボール界も"国際感覚"をこれまで以上に磨く必要があると思う。
永年にわたりAHF理事として活躍された荒川清美前副会長に代わり、新たにAHFの理事に渡邊佳英副会長が選任されたことは喜ばしいことである。またCOC委員（競技・組織委員会）に井薫常務理事、CCM（コーチ・方法委員会）に大西武三常務理事、EC（医事委員会）に西山逸成強化委員が各委員会に選ばれた。各氏から

得る情報を最大限に活用する日本協会内のシステム強化も急務だ。
その一方でアラブ指向にあるAHFに対して、理事会・各委員会に出席される方に、日本ハンドボール協会の考えをどう伝えていくかも大切である。

◆IHF(国際ハンドボール連盟)競技の行事予定

①世界選手権(男女・2年に1回)

②オリンピック(男女・4年に1回)

③ジュニア・世界選手権(男女・2年に1回)

◆AHF(アジア・ハンドボール連盟)競技の行事予定

①アジア大会(男女・4年に1回)

②アジア選手権(男女・2年に1回)

③ジュニア・アジア選手権(男女・2年に1回)

また世界選手権、オリンピック、ジュニア世界選手権等、IHF行事に合わせアジア予選を実施されることは、国内行事との調整が難しく、IHF・AHF行事に国内行事を合わせる方向にしなくてはいけない。

選手支援の環境整備を重要課題に

常務理事(企画・広報担当) 木野　実

世界の激動に合わせるかの様に、世界でハンドボールを実施している国が一三〇カ国を超え、欧州中心からグローバルな規模になりつつあります。
アジアでも中近東、東アジア、中でも韓国の躍進は目をみはるものがあり、我々にも大きく自信を植えつけてくれました。
日本もバルセロナ予選敗退の後、昨年極東大会に於て男子が優勝を飾り、チーム力のアップと力強さがみられ、希望がもてる様になりつつあります。来年のアジア大会での優勝、'95年のオリンピック予選を突破する上にも、この一年は全日本チームの支援、環境づくりに一層力を注いでいかなければなりません。

この二つの大きな大会で成果を挙げ、その勢いでアトランタ・オリンピックに向けていける様、愛好者並びに一般ファン、そしてマスコミ関係者への広報活動の強化を図っていく所存です。

昨年から今春にかけて、日本リーグの大会がテレビで4回にわたり放送されたり、地方でも数多く取り上げられ、関心も高まりつつあることも事実であります。

男女全日本チームの国内での活動をより活発にする意味からも、国際大会並びに強化試合をスケジュール調整しながら企画し、全員で盛り上げていかなければと考えております。

あらゆる機会をとらえて、全日本チーム並びに選手個人を幅広くPRすることにより、身近にご声援していただける様進めてまいりたいと思います。

全日本チームの強化、オリンピック出場だけが仕事でないことは十分承知していますが、少なくとも我々のチームとして、この時期は、最重点においてあたる必要を感じています。

そのためにも都道府県協会はじめ各連盟との関係、全日本選手が多く所属するリーグチーム関係の方々ともコンタクトをとり、支援づくりを強固なものにしていきたいと思いますので、ご理解とご支援、ご指導を賜ります様お願い申し上げます。

ネットワークとコンセンサスを緊密に

常務理事(普及担当) 小西　博喜

このたび続いて普及担当をさせて頂きます。平成4年度は全国小学生(第5回)、JOCジュニアオリンピックカップ(第1回)、全国高校選抜と、一貫性を持ったジュニア対策の柱が揃いました。しかし、今後それぞれ柱の企画整備、協賛企業制度と再生産の見直しが課題です。不況であればなおさら協賛企業の資金づくりと連動して、協賛企業の顔を立てる意味から、協会は大会にベストメンバーの対

応が必要であり、「スポンサーあっての大会だから…」が現状です。とりわけ急務は、スポーツ少年団育成であり、将来を占う小・中・高校選手の海外遠征が課題。マイナーであれば余計に「生き残り」をかけた戦いの冠スポンサーが必要です。

日本スポーツはジュニアからナショナルまでの指導に一貫性がないため、小学生、中学、高校、大学は輪切り状態になっています。つまり、指導者が勝利至上主義に走り、ハードトレーニングを課すため、故障をかかえたまま大学へ進学し、完治を待たずして試合を追いかける状況で、トップ選手の素質を持ちながらナショナルまで届かないという選手が多いと思います。その意味で、ジュニア対策をベースにナショナル生産課程に備えて、個人差を十分考慮した年令・性・体力に応じた医科学的トレーニングによる選手育成を期待したいと思います。

ナショナルクラスから子供たちの底辺までに対象を広げたオールラウンドの体力づくりや、基礎技術を総合的に取り込む必要があります。そのことがひいてはメジャースポーツへ向けて指導者の指針となり、整備充実していく大きな原動力として興味と魅力を引き出す力になることは言うまでもありません。

普及活動のジュニア対策が〝楽しいスポーツ〟としてメジャー化を目指すためには、全国各都道府県協会の組織とのネットワークとコンセンサスを緊密に持たなければ〝いつ、どこでも〟の草の根ハンドボールは絵に書いた〝モチ〟で終ってしまいます。新しい年度に向けて、ご意見、ご助言をお願いします。

日本リーグの繁栄こそが強化への道

常務理事（日本リーグ担当）　殿水　幸雄

昨年、日本ハンドボール協会の理事として日本リーグの担当をさせていただいたわけですが、何分にも不慣れなこともあり、格別の成果を挙げることも出来ずにあっという間に一年が過ぎてしまいました。

私自身は、日本リーグ運営委員を第2回より7～8年務めさせていただいた経験がありますが、その当時と比べると、企画面・実務面で大いに活性化しており、若い方々の前向きな行動力に隔世の感があったことには大変驚かされました。しかし、実際に各地で運営に携わっていただいている皆様、試合を観に来ていただいている皆様、そして日本リーグの各チーム、現場にはどのように映っているのでしょうか。おそらく私が驚いている程度の実感はないかも知れません。それだけに、企画・運営と言うものが手に取るように実感として感じていただけるのは難しいことなのだと痛感致します。今まで以上に地道な努力と前向きな企画・運営を積み重ねて行かなければと、リーダーとしてその重責を感じている次第です。

日本ハンドボール協会の中にあって、日本リーグはその頂点であり、日本リーグの繁栄こそが日本ハンドボール協会の強化、メジャー化への最短の道でもあります。日本ハンドボール協力の財政面に大きな影響を持っている点からも、その活性化がより求められるのだと認識しております。

世の中の流れが早く、かつ大きく変化している現在、スポーツ界もそのらち外にあるわけでなく、時代の先取りを心掛けながら変化に対応しなければ、メジャー化の道はどんどん遠のいて行ってしまうのではないでしょうか。

これからの2年間、単なる評論家になるのではなく、思い切った提案、改革を企画・実践して行きたいと思っております。経験不足かつ未熟ではありますが、若い力の新鮮な発想を大いに発揮してもらい、執行をして行くつもりです。全国の皆様のご指導、ご鞭撻と、ご意見を賜りますようお願い申し上げます。

加盟団体新役員挨拶

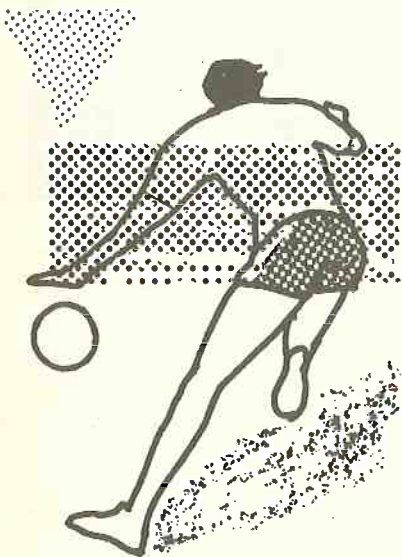
ふれあいの輪広げたい

全国高等学校体育連盟ハンドボール部部長
佐分　正典

私は、このたび全国各都道府県高体連ハンドボール部代表委員の皆さんにご推挙され、全国高等学校体育連盟ハンドボール部長に就任することになりました。昭和四十年から審判員として全国各地で皆様とともにハンドボールを愛好し、昭和五九年全日本総合選手権大会で審判員としての定年まで活動してきました。その後、日本ハンドボール協会審判審査委員を担当させていただきました。夏のインターハイでは、高校生のはつらつとしたプレーに接しハンドボールの醍醐味やパワフルなスピード溢れる躍動の素晴らしさを感じていました。全国高校生ハンドボール部男女、二千六七五チーム、二万三千人の高校生の皆さんのお世話をすることになり、その大任の重大さを考えるとあらためて身の引き締まる思いがいたします。

高体連ハンドボール部は、創立四十余年の歴史と伝統が蓄積され、先輩諸兄の築かれた功績はたいへん貴重な遺産として大切にし、前部長、須藤健児先生の功績を微力ながら継承して行きたいと思います。

高体連は、高等学校における体育の健全なる発展を図ることを目的とし、高校生の体育・スポーツ活動が単なる覇権を争うだけでなく、高体連のマークが示すように「若人の力と技と明朗な精神を養う」ことを目的としている。競技者は、明朗な精神で競技し、技術の錬磨により進歩し、平和で明るい社会を形成する人格形成の資質を培うものでなければならない。ハンドボールを愛好する高校生諸君、ハンドボールを通して全国各地の高校生と交流を深め、ふれあいの輪を広げたいものです。また、一方では高度なハンドボール技術を追求し世界に通じる競技力の向上と体力の強化を求め、日本のハンドボールが求められているオリンピックへの道を高校生の手で作っていきたいと思います。

全国各地で、暑い日も寒い日も毎日ご指導いただいている顧問の先生や指導者の皆さんとがっちり手を組み、高校生がインターハイの晴れの舞台で日頃鍛えた技術や能力を十分発揮できるような大会運営をしたいと思います。微力ではございますが、ブロック代表の常任委員の方々と事務局の皆さんとで力を合わせ目的達成のため努めたいと思います。日本ハンドボール協会、各都道府県協会、各連盟、そして、ハンドボールを愛好する皆さんの絶大なるご支援とご協力を心からお願い申し上げる次第です。

加盟団体新役員挨拶

知恵を出し合って・・・

全国教職員連盟理事長
遠藤　健次

去る2月の全国教職員連盟理事会に於いて新理事長に推薦いただき4月より就任いたしました。

本連盟は、昨年35回大会を開催いたしましたが、日本協会の中で唯一指導者のみの集団です。さらに大会と並行し、指導法、戦術、歴史、体力に関する課題等の研究発表会を行っています。それらを紀要にまとめ、すでに15集になっています。また、初代 故山田計会長を先頭に、役員・加盟選手の協力によって、今日まで様々な行事を開催し、成果を上げてきました。このように、かがやかしい歴史のある連盟の理事長としては、誠に微力な私ですが、関係各位のご協力を得て努力して参る所存です。

さて今後、本連盟の歩む路について私見を述べさせていただきます。

一、全日本教職員大会について

高齢化時代は、我が指導者連盟にも迫ってまいりました。年々大会参加者の平均年齢が高くなり、30歳を過ぎようとしていますが、熱意もあり研究心の盛んな年1回の開催です。全国の底辺で若い選手を育てている指導者であり、しかも自ら選手として実戦を通して指導法及び戦術、テクニックを研究する等将来のはずみの場であります。さらに本年度はマスターズ戦を取り入れるなど工夫して生涯スポーツをめざしたいと考えています。

二、研究発表会について

研究発表も年を追うごとに充実してきております。しかし、現在は教職員のみの発表ですが、広く門戸を開き、職種、国籍を問わず、しかも内容もハンドボールに関すれば可とし、幅広い視野での多くの方々の発表を希望しております。この発表会は、大会と同時開催であり資金不足、会場等問題はあるのですが、近い将来日本協会直属の行事にしたいと考えております。近年近隣諸国に技術面、体力面において遅れを感じている現在、日本協会が指導力を発揮して一層研究の充実を図ることが重要であるからです。

三、底辺の拡充強化・普及活動について

連盟の基本的な行動は何か、大会に参加し勝敗を競うのも、研究会に参加することも大切ですが、まず全国に散る大勢の仲間が手をとりあって、底辺の拡充、普及活動に努める事だと思います。技術、審判、各種大会の運営、母親と子供への対策、施設設備の研究開発、指導教本、後継者の育成等々、我我教職員が主体的に取り組まなければならないことが多くあります。

四、加盟団体編成の再検討

本連盟が主となり考えなければならないことに、加盟団体の再検討があげられます。大学、高校は別にして教職員、実業団、クラブ等の再考です。現在国内の小・中・高・大・実連・クラブの選手諸君は一部を除いてすべて我々の教え子であります。そして、それぞれの立場で、また分野で活躍しております。職場が違うだけで同じハンドボール仲間であるという観点に立って共通点を見いだし、近い将来には同一行動をとらねばならないことを、十分予想して準備に入りたいとも考えております。

幸い本連盟は、広い分野から人材は豊富です。各人各様の立場から、知恵を出し合い協力できれば日本協会の発展の大きな力になると確信しております。

終わりになりましたが、長年にわたって本連盟の運営にたずさわり、今日まで育てていただきました関係先輩諸氏に感謝いたします。今後二十一世紀に向けて新役員力を合わせて大きな飛躍をめざし、常に先見の目を持ち前進してまいる所存であります。

加盟諸氏はもとより、関係諸氏の一層のご指導、ご鞭撻を心よりお願い申し上げる次第です。

男子ジュニアナショナル韓国遠征に思う

団長　小西　博喜

平成４年度事業として、２月19日、ＫＥ－７２１便で大阪を発った(選手19名、役員５名)。今まで近くて遠い国とされていた韓国、日本との歴史的なつながりも、スポーツ交流の中では今やライバルの超大国に成長しつつある地盤を築いている。ソウル・オリンピック以後、アトランタ・オリンピックでもその実力は、まさにアジア、世界の頂点に立つ〝本もの〟として認めざるを得ない状況に至った。

今回の男子ジュニアナショナルにしても、韓国はまず越えなければならないハードルの第一関門であり、いよいよ以て強豪のライバルであることは間違いない。すでに韓国ジュニアナショナルチームはヨーロッパ遠征を実施しており、世界の挑戦に向けて技術強化の一貫指導に着々と地固めをしていることは見逃せないキャリアだ。

日本ハンドボール協会もようやく、全国小学生大会、ＪＯＣジュニア・オリンピックカップ、全国高校選抜大会と、ジュニア対策の突貫工事が進む中で、将来的な強化展望をにらんだ整備計画と充実を図り、有名無実な形骸を残してはならない。

今日の韓国遠征からみても、まずコーチングの基礎技術指導は、ハイテクノロジー的な世界的センスで指導されている。例えばフットワークのスピードある攻防と身のこなしは、アジア人的な高さ、厚さの体格のハンディーを自信を持ってクリアーする気迫とスタミナを常に蓄えている様に思える。

そこで日韓の差があるとすれば何が起因しているのか、その対応を打ち出さなければならない。日本のジュニア対策の国際的技術研修が韓国遠征１回の打ち切りでは、この時期の精神的成長過程から考えて、技術的に最も伸びる傾向にあるだけに上限のピークを抑制してしまうことが危惧される。次ハ世代の担い手候補の意欲と技術開発は自らの体験によって試行すべきであり、ヨーロッパジュニア対策挑戦へそれぞれの課題を設定し、模索する糸口をつかんで欲しいと願うからである。長い年月にわたって韓国ナショナル男子監督であった柳在忠氏(ソウル・オリンピック男子銀メダル)は、ヨーロッパに於ける度重なる長期合宿によって、対ヨーロッパ流の戦術と体質に変貌させた功績は、大きな底力、自信に結びついているといえよう。

今、日本国内の、バブルがはじけた景気沈帯のムードと不況風は、確実にスポーツ界にも波及し、スポーツ界から撤退する企業論理に〝冬の時代〟到来を予感させる出来事が続いている。業界ではさまざまな経費削減案が出されている。多くの企業が大会のスポンサーを降り、また部活動を縮少し、停止し始めているのが現状である。結局、日本の社会経済済と同様、不況感に襲われるスポーツ界にもバブル時代のツケがあるのかもしれない。しかし、一方では、その不況にも微動だにしない企業や人気スポーツの実態は不況とは無関係に正反対の方向にも走っている。不況であればなおさらマイナースポーツ界は、企業努力ならぬ、小さなたくさんの〝スポーツ組織努力〟が必要な時代ではなかろうか。

各企業ともスリム化を図ろうとしている現在、メリットがあった時代の、企業のイメージアップに連動する「生き残りをかけた」スポーツへの関心を、少しでもフィードバックさせなければ道は開けてこないと思う。そのためにも、ジュニアナショナル選手強化が日本協会事業のサバイバル的なイベントであり、メジャースポーツへの引き金である。

これから先の、可能性を秘めたものには魅力があるし、ブームを呼ぶＪリーグはまさにその魅力的な対象であり、野球を追い越した現象を呈している。その意味でも、インパクトの強いイベントを起こせば、時代の傾向には企業は敏感である筈だし、注目度の高い、こういった〝勝ち馬に乗る現象〟が、不況下の企業とスポーツの因果関係をつくっている。

さて、「全日本選手権」、「日本リーグ」クラスと銘打っても、閑古鳥が鳴くハンドボールムードになっていないか、再チェックをして論議する必要がある。外国人一流チームの監督、選手の試合には入場料が高額でも多数の観客が集まるのが今の日本の傾向となっている。

テニスかサッカーか、ハンドボールか、今、どちらのスポーツに協賛した方が得か――という選択肢に、企業側はいつも目を光らせている。確かに人気が出れば、企業はいつでもそのスポーツに便乗してくる。企業は広告活動費をより効果的に活用するため、人気の高いスポーツ、イベントに集中する。また日本はこれから、前例のない〝国際総合大会ラッシュ〟を迎える。１９９４年に広島で夏季アジア大会(ハンドボール参加)、'95年は福岡でユニバーシアード夏季大会(ハンドボール落選)ほかである。もちろん、そこには人が集まる数多くの魅力ある商品価値がおかれている筈で、〝生き残り〟をかけた創造的な付加価値を作り出さなければ、いつまでもマイナー商品としてのレッテルが残る。あながちないものねだりと片付けられない。

ハンドボール界の新年度に向け、日本協会の財源の生産に英知とアイディアの結集を期待し、明日への夢を担うジュニアナショナルの強化策を打ち出す可能性は十分潜在するし、サバイバルに活力を見いだすことが〝勝ち馬〟に乗る機会となろう。

以上、多くの課題を模索しながら２月23日帰国した。

全国高等学校ハンドボール選抜大会を終えて

愛知県協会　村木　啓作

平成4年度(第16回)全国高等学校ハンドボール選抜大会は3月24日(水)から28日(日)までの5日間、名古屋市の枇杷島スポーツセンター、露橋スポーツセンターを会場に全国9ブロックから出場権を獲得した男女各26チームの参加で開催されました。大きな事故もなく本大会が無事終了することが出来ましたことに対し、関係の皆様方の御支援、御協力に厚くお礼申し上げます。

15回大会が終わったのがつい先日のような気がしていましたが、もう一年たってしまいました。16回大会の準備はほぼ例年と同様、10月にスタートしました。県内役員の編成、各係責任者の決定、各係毎の打ち合わせ会等、例年行っている大会ではありますが、少しでも前年の反省が生かせられたらと幾度も準備委員会を行っています。全国大会といっても特別に専任の者がいるわけでもないので、皆校務の合間を抜っての仕事ですから正直大変ではあります。特に2月末の組合せが決定してからの1週間は、学校の諸行事とも重なり、目の回る忙しさです。

本年は例年使っています愛知県体育館が、明年開催される愛知国体の為に改修工事に入り使用できないため2会場に分散しての開催のため、大会運営も大変でした。またチーム関係者には練習場所、駐車場等大変ご不便をおかけしたと思います。何卒お許しを賜わりたいと思います。

24日は午後3時から枇杷島スポーツセンターで開会式、日本協会、渡邊副会長にも参加していただき、元気はつらつとした入場行進で本大会の幕があがりました。25日から2会場に分かれ、男子は枇杷島スポーツセンター、女子は露橋スポーツセンターで競技が開始されましたが、これも例年の事ではありますが、朝9時20分から午後8時までの10試合。今年は男子で2試合延長戦があったので終了は8時40分ととっても長い1日となりましたし、選手の皆さんにとってはコンディショニングは大変だったと思います。同様なことは第3日の試合日程でもあります。準々決勝、準決勝を同一日に行うため、1試合おいてすぐあとに準決勝を行うチームが出てしまいます。精魂使いはたしてもう1試合は本当に過酷だなあと思います。経費の点等で無理とは思いながら毎年思うことのひとつです。

最終日28日は女子も枇杷島スポーツセンターで、10時から決勝。9時の開場とともに小松商業、名短付の応援の方々がつめかけられ熱気に包まれる中での試合が開始されました。結果は名短付高校の優勝、地元大会関係者の疲れが一気に吹き飛んでしまうほどの疲労回復の特効薬となりました。

毎年の開催でマンネリに陥ることがあるとは思っていますが、どうか是非この大会が今後とも発展し高校生の春は名古屋の選抜からといわれるためにも、今後とも色々ご指導を頂きたいと思います。

最後に本大会に補助員として参加した者の感想と、熱心に試合を観戦した高校生の感想を載せて終わりにいたします。

補助員として参加して

補助員としてのこの5日間は、本当に早かったです。私たちの主な仕事は、受付やモップかけ、放送やスコアーをつけることでした。これは各高校が分担しながら、担

当していました。慣れない仕事に緊張し、毎日くたくたになりました。その中でも一番緊張したのは、開会式でのプラカード持ちでした。いろいろな順序があり、それを緊張でパニックしている頭に叩きこむのは至難の技でした。フロアーに出てライトを浴びた時のあのフワフワして、地に足が着いていない様な感覚は、今でも覚えています。開会式でのプラカード持ちは、この大会での仕事の中で、一番の思い出です。

私は今回初めて補助役員という形で、裏方の仕事を見たり、体験したりしました。今までは地味で嫌だと思っていたけれど、案外楽しいことに気が付きました。色々なチームの試合を見ていると、一番ベストの状態でプレーをさせて上げたいと思いました。そのため客席などのゴミひろいも苦痛にならなかったし、試合が終わるたびに、床のモップ掛けを私でよかったらしてあげたいと思いました。いま大会が無事に終わってホッとしています。この5日間でハンドボールがかっこいいスポーツだとわかりました。以前よりハンドボールが好きになりました。そしてハンドボールがもっとメジャーなスポーツになり、もっと多くの人に知って欲しいと思っています。最後に補助員としてこの大会に参加できて、本当に良かったと思っています。(名古屋西高校 栗岡牧紀)

初めて試合を観戦して

試合を見に行って、ハンドボールというものを改めて実感させられたような気がする。大会初日だと言うのにものすごい盛り上がりであった。いままで自分達のやってきたことが、試合ではなくお遊びとしか考えられないほどいい試合ばかりだった。延長戦に入りさらにペナルティスローコンストへともつれ込み、それでも決着がつかず、ついにはサドンデスになった試合などは、客席を大いに沸かせていた。やはり代表になるまで勝ち抜いてきたチームばかりなので点差がそう開かず、最後まで諦めず点を取りにいこうとする選手達を見ていると、どうしても応援したくなる。

どちらが勝ってもおかしくない試合ばかりであったが、だが試合をやる以上勝ち負けは決めざるを得ない。勝って喜びの余りお互いに抱き合うチームの脇を、負けたチームが淋しそうに帰っていく、そんな姿が心に残った。ハンドボールでは最後の数秒で勝者と敗者が入れ替わったりするので、自分のミスで失点を許した選手などは実に悔しそうで、僕はそんな所がいいと思う。スカイやお手本のようなセットプレー等、さまざまな方法で攻撃が展開されていった。スカイを実践でみるのは、初めてだったので、きれいにきまるのが不思議だった。ディフェンスもどこのチームも上手だった。良く動き回るし、2人が協力してとめたりするのも何気なくこなしていくのだから当然の事のようだが感心してしまった。

力の限りつくして試合をしている選手達に、わざわざ遠くからやってきた御両親やOB野人たちが、客席から必死の応援をして選手がそれに答えようと頑張っている姿はいいものだと思う。即席の応援団ができあがったりと、客席の方の盛り上がりもすごかった。選手も一生懸命だった。こんないい試合を見れて良かったと後になってつくづく思うのである。

(名古屋西高校 鬼頭剛)

男子

やっとたどりついた頂点

熊本市立商業高校

大宮　泉

昭和53年春から始まった全国高等学校ハンドボール選抜大会も、今年で第16回を迎え、そして幕を閉じました。

熊本市立商業高校が、初めて本大会に出場したのは昭和62年春の第10回大会でした。第1回戦は、私の敬愛してやまない鈴木先生率いる東京代表の明星高校との対戦でした。後半こそ10対9と互角に戦ったものの、19対25で敗退し、以後平成2年春を除き、本年6回目の出場で、ようやく頂点にたどりつくことが出来ました。

選抜大会での優勝がこんなにも苦しいものとは……。ここ数年準優勝(1回)、3位(3回)と実績はあげてきましたが、どうしてもあと一歩というところで涙をのみ、頂点を極めることが出来ず、関係者のご期待に沿うことが出来ませんでした。また「もう、勝つだろう」「今年こそ優勝だ」と言われ続け、本大会に出場するたびに精神的圧力がかかっていたのが、今回の優勝で一気に振り抜けた感があります。

当部は昭和32年4月、当校創設と同時期に私の恩師でもある津田修先生によって創部され、以来35余年の歴史をもち、全国選抜大会、全国高校総体、国体と数多く出場し、全国高校ハンドボール界でも古豪・熊本市商と言われながらも、長期間、頂点に立つことが出来ず、全国の壁の厚さに涙をのんでいました。

昭和58年春、津田先生の転勤に伴ない私に監督のバトンが渡されました。が、中学時代の恩師宍戸幸一先生の手解きで始め、高校では津田先生、日体大で荒川清美先生のご指導の下、自からのプレーはどうやら出来ますものの、指導についてはまったく手探りの状態が続き、全国の好指導者と言われる方々の真似事から入門しました。当時の当部は、部員も少なく、他のクラブからの手を借りて出場する状態で、当時の選手達にとっては随分と苦労をかけたと思っております。

ハンドボール未経験者を集め、1年365日、1500時間の練習を始めたのもこの頃からでした。

2〜3人の経験者が入部しはじめた昭和60年頃から、未経験者の練習にも熱気があふれ、クラブとしての型もととのって、監督就任4年目で全国大会（選抜）へ出場することが出来ました。その後、全国でも有数の激戦区、熊本県の予選を戦い抜いて例年全国大会へ出場していますが、その原点は初出場の全国選抜大会で敗退した口惜しさと、その帰途名南工業高校での1週間の他チームとの合宿で得た「猛練習以外に勝つ道はない」と言う教訓。その1週間は、当校での練習の3ヶ月分にも相当する中味の濃いものでした。

生徒達の口惜しさがバネともなり、肉とも血ともなって次の代、次の代へと受けつがれ、平成2年度のとび梅国体での優勝、平成3年度の静岡インターハイの優勝、そして今回の優勝へと一歩づつ着実に階段をのぼりつめてきました。

勿論、様々な人達に助けられ、励まされてこの偉業はなりました。特に松村校長が就任と同時に、自宅へみえられ、ハンドボールを通じて熊本市商を活性化させようとの言葉で、一つの部活動で出来ることならと考えを新たにし、その為にも一段と練習に励みました。

常に生徒と共に語り合うことは、創設時代から苦難の道を切り開き全国大会への道を先導してくれた先輩達のことである。そして全国大会に出場できなかった時代でも決して努力をおこたることなく連綿としてクラブ活動を続けてこられた、先輩達のことを!!である。この様に陰でささえてこられた先輩達が、優勝をだれよりも喜んでくれたのではないか…と。

また優勝まで理解ある態度で応援して下さった保護者の方々、御指導、御支援頂きました小・中学、高校、協会関係の諸先生に、心から感謝を申し上げますと共に、今後益々努力を重ねていく覚悟ですのでよろしくお願い致します。有難うございます。

女子

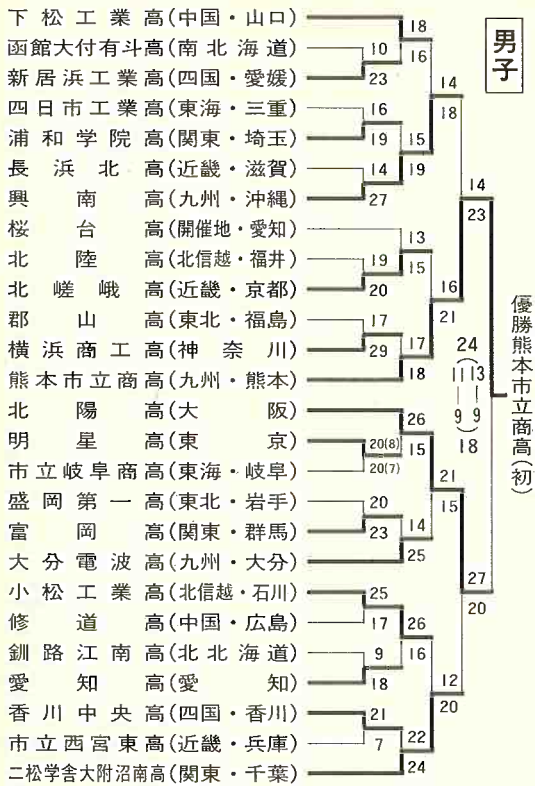
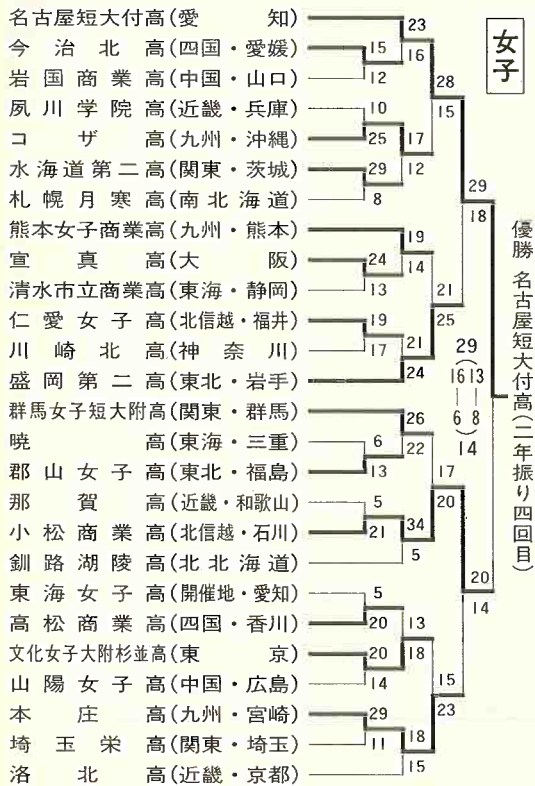
優勝監督として…

名古屋短期大学付属高校

大橋　晃

新チームは、10月に始まりました。まず始めに手掛けたのが走り込みと、DEFでした。走り込みは約1kmの距離のインターバルを1日5本ぐらいを、メニューの柱にして坂道ダッシュ、20mダッシュetc。また、並行してディフェンスフットワークを1日約1時間1カ月間行ないました。目標は、二次速攻と、0−6、1−2−3ディフェンスの強化です。

この課題は、前年度のチームの時から行なっていたため、個々の1対1を守る能力は高く、あとはディフェンスコンビネーションとシステムの理解でした。

約1カ月が過ぎ、0−6ディフェンスを試してみたいと思ってい

た頃、東京女子体育大学が名古屋に来ている事を聞きつけ、さっそく練習マッチを申し込みました。結果はまずまずでした。内容としては、ディフェンスより、攻撃が思っていたよりよく、昨年の先輩たちの攻撃をしっかり後輩たちが観察していたことに気付き、新チームスタートにして強化ポイントとは逆に、自分の気付いていなかった面をまざまざとみせられた思いがしました。

県大会は、1年生を伸ばす目的から、ある程度のマイナスを覚悟で、2年生の中に1年生を混ぜて試合を行ないました。東海大会は、1－2－3ディフェンスを中心に攻撃的に試合を運ぶことができ、結果、内容ともに、良かったと思いました。しかし、大会後何かもの足りないものを感じていました。

第16回の今大会は、1－2－3、0－6ディフェンスを持って登場しました。開会式を堂々と行なっていた選手たちを見て、私自身が何かいつもと違う感じがしていました。それは大会が終わって分かってきました。

試合内容は、2回戦、今治北高です。立ち上がりからちぐはぐで、思っていたよりディフェンスが悪く苦戦。この日のミーティングで、選手たちに何か足りないものがあり、約1時間選手たちに勝ち負けより大事なものがあるという内容の話をしました。3回戦は、コザ高。オフェンスがよく、ディフェンスもかなりの自信があると聞いていたので、苦戦を強いられると思っていました。が、地元の利、大応援団のおかげで、快勝。続く準決勝は、盛岡第二高、この試合も快勝。

決勝は、小松商業高。前半を13－8で折り返し、ハーフタイムで円陣を組んだ時、2年の児島が、バタリと倒れてしまいました。いつも生徒の体調は聞かずともだいたいは把握していた私は、倒れるまで頑張っていた事に気付かずにいました。この時私は、ただ彼女のそばに付き添っているしかできませんでした。なんの言葉もかけれずに…。しかし彼女は、ハーフタイムが終わると何事も無かったようにコートに立ちました。私はこのとき県大会で、東海大会で、またこの大会の開会式で、何かもの足りないと感じていたものに気付きました。それは、私の中にある慢心だったのです。「優勝候補。負けたら…。勝ちたい」。その心は、彼女たちの一番良いところを引出せずに、また気付いてやれずに、そして分かっているつもりになっていたことなのです。そして後半が始まりました。

私は、選手たちがこれほど輝いて見えたのははじめてだったのです。他の選手も、児島のそんな姿に何かを感じ、大会は終わりました。試合が終わって、児島は、再び倒れました。彼女はこう言いました。「私が立っていられたのは、みんながいたからだ」。今治北の試合のあと、勝ち負けより大事なものがあると、選手たちに胸を張って話していた私が、選手たちに、また教えられました。思えばいつもそうだったように思えます。

この大会で、私はもっといいチームを作る勇気が沸いてきました。そして、「ここまでつれてきてくれてありがとう」。伏見工高の山口先生の言葉を借りれば「ただただ、ありがとう。おまえたち、かっこいいぞ（かわいいぞ）」と心の中で叫んでいた。

JOCジュニアオリンピックカップ大会●報告

大会誕生の経緯と運営について

大阪協会　東　嘉伸

日本協会は今世紀最後となるであろう全国大会を誕生させ、大阪協会は名誉あるJOCジュニアオリンピックカップ・ハンドボール大会を引き受け、立派に第1回を終了した。

平成5年3月27日(土)～28日(日)、堺市に於いて、次代の日本を担うジュニア選手の発掘と育成を期して開催された。

普及部、強化部、全国中学校専門部それぞれの立場でいづれコメントされると考え、今大会主管協会の立場で誕生の経緯、準備、運営、次回への展望など、あと始末さえ手就かずの今、編集部に求められるまま報告をまとめてみた。

◎大会誕生の経緯

十数年前より春休みを利用し、地理的に恵まれた大阪でも全国から多数の中学校が集まり交流試合、親善大会が行われている（近年は100校を超えている）。

このエネルギーを全国的なレベルでの中学校選抜大会に発展させたい願いは、広く中学校の指導者の中にも高まっていた。

平成9年第52回国民体育大会が大阪開催、ハンドボール競技の会場が堺市と高石市に決定しており、堺市では新しく記念体育館（2コート可）の建設が予定され、京都田辺町の全国小学生大会の例もあり、市レベルからも全国的な大会開催を望まれていた折でもあり、水面下で展望を広げかけていた。

あれやこれやの思惑の中で時期尚早の声が大きかったが、神田清会長の強い決断とJOCジュニアオリンピックカップの制定がこの大会に適用されたことにより、一層開催へ加速することとなった。

小西博喜普及部長と真田元全国中学校専門部長の再三にわたる話し合いと調整はなされていたが、平成4年8月、福井市で開催された普及部中学校専門委員会のゴーサインを待って事実上大阪協会も動きに入った。

大会要項も二転三転するなど、JOCや日本協会も冠の扱いとその方向性に苦慮されたように思えた。

ブロックの事情で申込み締切り期限も延期せざるを得なかったが、全国9ブロック代表が北海道から沖縄まで広い範囲で予選を経て欠くことなく送り込んでくれたことは、スケジュール的に参加出来なかった一部府県に気の毒だったが、各府県協会、各ブロック協会、分けても全国中学校9ブロック長のリーダーシップとご努力は大変なものであっただろうと改めて敬意を表したい。

◎今大会で授与された優勝杯、優勝旗など

一、優勝杯―日本協会（チーム持ち回り）
一、優勝旗―堺仁徳ライオンズクラブより寄贈（チーム持ち回り）
一、優勝楯―堺市長（チーム持ち回り）
一、優勝楯―朝日新聞社（大会毎贈与）
一、準優勝杯―大阪協会（チーム持ち回り）
一、JOCカップ―JOC（最優秀選手男女各1名）
※今回、有望選手に用意をしていなかったことを反省材料としている。
一、メダル―大阪協会（1位～3位全選手）

◎優秀選手選考委員

今大会は将来オリンピック競技大会や世界選手権等に活躍が期待できるジュニア選手の発掘を目的とした大会ということで、日本協会強化部と普及部から推薦いただいた5名の選考委員によってその任を全うしていただいた。特に第1日目は2コートで競技が行われたこともあり、休憩をとることもなく厳しい目で対処していただいたことを添えておく。

▼小西博喜氏（日本協会普及部長）
▼樫塚正一氏（強化部女子担当、前全日本女子監督）
▼蒲生晴明氏（強化部男子担当、全日本男子監督）
▼真田　元氏（全国中学校専門委員長）
▼溝口博一氏（全国中学部審判長）

◎夢を育ててくれた全日本男子蒲生軍団

大会前日の26日(金)13時～15時、堺市の国体準備室啓発事業のあと押しで蒲生晴明監督、関健三コーチをはじめ全日本男子チーム17名が華やかに公開練習。エキシビジョンゲーム、研修会等を行い大会を盛りあげてくれた。大会中も蒲生監督は勿論、関コーチ、橋本行弘主将、日本のエース中山剛、田中茂の3選手がオリンピック・ユニホームを身につけ、開会式では

蒲生監督が激励のことばを、そして参加全選手に前日までかかりようやく書き上げたという全日本男子チームのサイン入り色紙を橋本、中山、田中各選手からプレゼント。さらに試合が終るたびに各チームの参加選手に親しく貴重なアドバイスや励まし、その上記念写真やサインの要望に応じるなど、閉会式のあとまでもハンドボールだけしか出来ない大切な夢を育ててくれた。

強化部そして蒲生監督、関西スタッフ、全日本男子チームに心からお礼を申し上げたい。

尚全日本女子チームが欧州遠征中であったことを付け加えたい。

◎大会

北海道から沖縄まで全国9ブロックが欠けるところなく男女各9チーム、開催地大阪の男女を加え合計20チームが参加。そのうち選抜チームでの参加は男子4チーム(北海道、茨城、富山、京都)、女子2チーム(北海道、富山)。しかも優勝した男子北海道、女子富山は共に選抜チームであり、その努力が一層輝やかしいものに思えた。

本来JOCカップの主旨によれば選抜チームでの参加が望まれているが、年度途中からの企画となった今大会にはむづかしい背景も多く、次回へ各々の努力目標の一つとされていた。

審判団も国際に準ずる浜田浩嗣、馬場保夫の兵庫ペア以外は中学校の先生で組織し、全国中学部審判長溝口博一氏が審判長を務め、近畿協会審判部長の藤本昇氏が副審判長として大会運営に当ってもらえた。

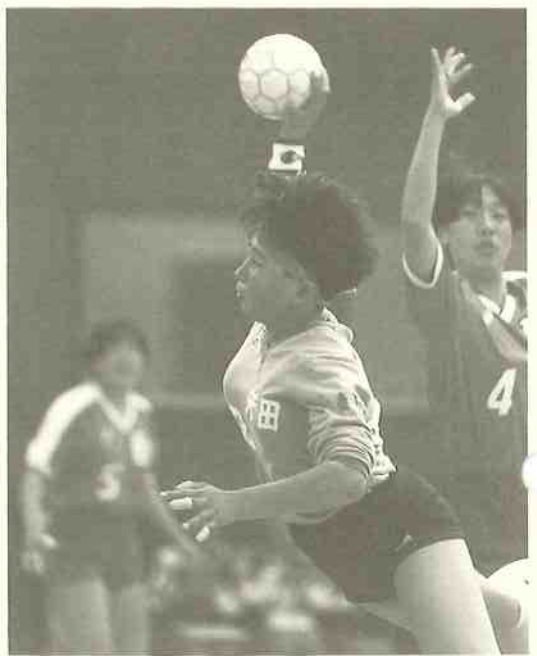
試合はどの試合もさわやかで、各チーム共よく走り、よく跳び、よく投げ、観る人に感動を与える好ゲームの連続であった。

◎その他

(1) JOCジュニアオリンピックカップ・ハンドボール大会発会記念懇親パーティーが26日18時～21時、堺市ホテル協会の協力によりホテル・サンプラザで開催。

主な出席者は次の通り。

- ●日本協会より立石孝雄副会長、中澤重夫専務理事、市原則之JOC委員
- ●堺市教育長、社会体育部長、課長他(※市長、議長市会延長の為止むなく欠席)
- ●朝日新聞社、朝日放送、ミズノ、堺仁徳ライオンズクラブ会長、事務局長
- ●堺地場産業振興会、堺市文化観光協会
- ●全日本チーム代表、審判長、副審判長
- ●全国9ブロック長、近畿協会各理事長
- ●近畿中学校各専門委員長、大阪協会役員
- ●堺連盟役員

(2) 昨夏福井市の全国中学大会で男子の部で優勝した堺市立浜寺中学校のブラスバンドが協力を申し出てくれ、入場行進、賞状授与に花を添えることができた。

宣誓は大阪代表玉出中学校主将松本奈々さんが力強く行った。

◎次回への展望

バブル崩壊の直撃をヒシヒシと感じながら準備期間の短かい全国大会の誕生であり、今回大阪協会は早々に別途独立会計とし負債は次年度に引き継ぐ方針で大会開催に臨んだ。

今後堺市に広く深く働きかけると共に、日本協会との連係の中でより一層関係各社の協力をいただき浄財の確保に努め、参加選手に物心両面で支えることを考えねばならない。

定着する大会はその意味で希望である。

各々各方面からのご意見を頂載しながら次へのステップを大切にしたい。

第1回JOCジュニアオリンピックカップ

大会を終わって

㈶日本中学校体育連盟ハンドボール競技部　審判部長　溝口　博一

記念すべき第1回JOCジュニアオリンピックカップ・ハンドボール大会が、大阪の地堺市において盛大に開催されました。年度途中での開催であり、各ブロックとも、その対応に大変苦慮致しました。

本大会を終えて、特に感じたことは、高校生であればインターハイ、国民体育大会、春の選抜大会と数多くありますが、中学生の全国大会といえば、㈶日本中体連が主催団体として開催する夏の全国中学校大会しかありません。中学生にも、全国を舞台として活躍できる場が増え、さらに将来のオリンピック候補選手として認定されることは、生徒達にとっても、指導者にとっても、喜ばしいかぎりです。そのうえ、テレビや雑誌等でしか見聞きできなかった全日本チームとの温かい交流会が大会期間中行われたことは、生徒達にとって、これからの励みにもつながり、一生の思い出として心に残ることと思います。また、生徒達だけでなく、保護者にも深い感銘を与え、ハンドボールの知名度を高めることにつながったと思われました。

2日間のゲームを通して感じたことは、中学生においても、選抜チームを組むことによって、一人一人の能力を最大限まで伸ばすことができ、ハンドボールのレベルアップにつながることだと思います。しかし、現状から考えると、各ブロックによっては、多種多様な諸問題を抱えており、すべてのブロックが選抜を組む、実現までには、まだ少し時間がかかりそうです。

さて、そうした中で、特に目を見張るものは、男子で優勝した北海道選抜チームでした。チームとしての総合力もさることながら、一人一人の運動能力が高く、ボールテクニック、ボディーバランス、走力等が、かなり高いレベルまで備わってきている生徒が多かったことです。また、北海道ブロックが優勝したことは、今後に大きな期待を持てることです。それは、今までの全国大会での結果から見て、東北、北海道ブロックにおいては、普及面における立ち遅れが感じられました。その原因の一つとして、チーム数が他のブロックと比べ少ないことです。このような現状の中で、北海道選抜チームが優勝し、さらに、そのチームのメンバーの中から最優秀選手、並びに有望選手が選ばれたことはチームの指導者をはじめ、関係各位の先生方のご努力に敬意を表すと同時に、今まで以上にブロックの活性化につながり、全国に新たな新風を巻き起こし、中学生のハンドボールがますます発展することと思います。

本大会の開催にあたり、喜ばしいことの一つには、㈶日本中体連ハンドボール競技部の意向をくんでいただき、小・中学校の先生で(日本協会指名レフェリー2名)審判団を構成していただいたことです。全国的に見ても、小・中学校の先生で上級審判資格取得者が少なく、一人もいない地区もあります。また、上級審判資格を取得しても、活躍の場が少ないのが現状です。こうした状況の中で㈶日本協会審判委員会の委員長である大塚文雄先生をはじめとして、委員の方々、諸先生方のご理解とご協力により、㈶日本中体連ハンドボール競技部の意向をくんでいただいたことを深く感謝致しております。今後は、上級審判員養成に努力し、活性化を図りたいと思います。

本大会において、忘れてはならないことがあります。それは、女子のチームの中で、身体的なハンディキャップを背負いながら、一生懸命にプレーをし、これからの成長がいっそう期待される姿が見られ、観衆や大会関係者の胸を強く打ちました。このことは、大会のみならず、日本のハンドボールの将来を担う生徒達に勇気と希望を与え、今後の励みになったことです。また、大阪ハンドボール協会のご好意により特別賞を授与していただいたことも忘れてはならないことです。

最後になりましたが、本大会の開催にご尽力をいただきました関係機関、諸団体に厚くお礼申し上げます。来年第2回大会に期待を寄せて、私の感想と致します。

第1回JOCジュニアオリンピック

男子・北海道選抜 女子・富山選抜 優勝への道

ハンドボール発展のためにはジュニア層の充実が欠かせず、特に中学界の浸透が未だ不十分な現在、待望の全国中学校大会に次ぐ第二弾としてJOCジュニアオリンピックカップ大会が、世界最大級の前方後円墳として知られる仁徳天皇陵をはじめ数多くの史跡を持ち、中世には海外貿易の拠点としての役割、そして将来的には「テクノポート大阪」の一角を担うといった、まさに過去から未来へ発展する町、大阪府堺市にて3月27・28両日に開催された。

この堺市は、ハンドボール競技としても昨年8月に男子第31回・女子第22回西日本学生選手権大会を開催し、平成8年には第40回全日本教職員選手権大会を、翌9年には第52回国民体育大会を迎え、大阪ハンドボールの中心都市として今後益々期待されている。

本大会はネーミングの如く日本オリンピック委員会が後援し、未来の「オリンピック有望候補選手」の発掘のための強化事業のひとつとして打ち出された。勝敗よりも各選手の素質、力量にポイントを当て、将来に伸ばしていこうというのが第一目的。

代表校は全国9地区の代表に開催地の大阪府を加えた男女各10チーム。今までになかった目的を持つだけに周囲の期待は大きい。

★男子

■1回戦

●富山選抜（北信越）25―18 西朝明中（東海・三重）

初戦でいきなりの延長戦、つねに後手に回っていた西朝明中だったが、試合終了1分前に同点に追いついた。延長に入って力尽きたのは惜しまれた。西朝明中は一人で10点をあげた水谷が孤軍奮闘した。

●北海道選抜 14―10 総社西中（中国・岡山）

昨夏の全中で今回も出場した東根一中を破った凌雲中を中心とする北海道がディフェンスのまとまりで勝利を得た。「全国」を経験している北海道とやはり全中に出場したが、メンバー一新との差が出た。

■2回戦

●神森中（九州・沖縄）14―11 東根一中（東北・山形）

全体的に小柄だが攻撃的ディフェンスで活路を見いだす神森中は常に先手を取ったままゲームを制した。

●茨城選抜（関東）20―12 香川一中（四国・香川）

体格で劣る香川一中。前半は積極的に前に出てキープするGK池田が再三の好守を見せるが、後半に入りスタミナが切れたのか。点差以上に香川が健闘したなかなかの好ゲーム。

●富山選抜 14―11 京都選抜（近畿）

選抜チーム同士の対決ながら大型選手を揃えロングで勝負する京都に組織プレーで対抗する富山。コンビネーションのまとまりの差が出た感があったが、京都は大柄でがっしりした体格の都木が目立った。

●北海道選抜 14―12 大正東中（大阪）

好GK嶋崎を持ち、前評判の高い地元の大正東中。大型チーム同士の対決は身長を上手く使って守るGK館山を中心とした北海道が粘り勝ち。大正東はプレッシャーもあったようだ。

■準決勝

●富山選抜 20―18 神森中

清水、林原のダブルポストで相手ディフェンスを揺さぶり、山下、山口の両エースがシュートを決めて過去二戦を勝ち進んで来た富山に対し、スピード溢れるプレーを最後まで続ける神森中。富山もローリングを仕掛けて相手ディフェンスを割ろうとする。同点になること6回の接戦は残り5分19対16。富山3点リードになり神森中はなんとバスケットボールさながらのオールコートマンツーに出て相手ボールを奪おうとするが、善戦むなしく敗れた。最後までスピードプレーを展開する神森中の今後が大いに楽しみだ。

男子優勝の北海道選抜

●北海道選抜 14―13 茨城選抜

接戦を続けながら勝ち進み、トーナメント特有のまさに「乗っている」北海道。試合開始からいきなり4連取で波に乗る。がしかし攻撃時のラインクロスがきっかけでリズムに乱れが出る。連続PTで茨城もエンジンがかかり始めるかと思ったが、両チームともラインクロスやオーバーステップが連続してかみ合わない。7分過ぎ大型エースの三田がジャンプシュートを決めると再び北海道がペースを取り戻す。15分8対5になったところでたまらず茨城は三田をマンツーで守り必死の反撃。前半を8対8の同点に持ち込む。

後半になると流れを戻したい北海道はサイドにサウスポーの高橋を投入。連続ポイントを決めてベンチの期待に応えたところはここまで勝ち進んで来た北海道を象徴しているかのようだった。12分沢田退場の間に茨城は2点連取し12対12の同点にするが残り2分、13対13のところで茨城は痛いGK石井の退場。沢田がPTを慎重に決めて14対13と北海道が嬉しい決勝進出となった。

■決勝

●北海道選抜 17―10 富山選抜

女子に次いでアベック優勝を狙いたい富山と大殊勲の北海道との争いとなった男子決勝戦。準決勝に次いで再び北海道が3連取。富山も1点を返すが再び北海道も速

攻などで連取。結局7対3と今までになく4点リードで前半終了。

後半になっても北海道の猛攻が続き、5分で11対3。7分と9分に相次いで退場を受けると、ディフェンスが甘くなったところをカットインなどで4連取される。過去3試合の北海道を見ているとミスしたり（オーバーステップやラインクロス）、或いは警告や退場などをするとたんにペースダウンしているのがやや気になるが、そこはまだ中学1・2年生、致し方がないだろう。6人に戻った12分、今大会のナンバーワンエースともいうべき三田がジャンプシュートを決める。以降は危なげないペースで17対10で終了のホイッスルが鳴った。

優勝した北海道は4校からの選抜、とはいっても函館凌雲が9人を占め（GK館山は札幌南ヶ丘）、合同練習はわずか2回のみ。ビデオで研究したというが、北海道勢にとって初めての全国優勝。これを機に北の地でも普及の輪が広がってくれることを望みたい。

★女子

■1回戦

●矢田中（東海・愛知）15―7 二瀬中（東北・福島）

全中にも過去7回（二瀬中）、2回（矢田中）出場経験のある両校だが、試合は前半であっさりけりがついてしまった。

●河内中（中国・山口）15―7 西原中（関東・神奈川）

ともに実力を持ったチームの対決。初戦で争うにはもったいないカードだったが、意外なほど西中原に粘りが見られなかった。藤長、石岡の二人にやられた。

■2回戦

●佐伊津中（九州・熊本）25―16 衣川中（近畿・兵庫）

寺・前田（佐伊津中）、近藤・円羽（衣川中）と大砲二人を持つ両校。接戦が期待されたがこれも意外な大差になってしまった。

●富山選抜（北信越）38―4 北海道選抜

富山のワンサイドゲーム。体力、スピード全て富山についていけなかったが、北海道も最後まで一生懸命コートを走りまわった。

●矢田中 16―5 香川一中（四国）

香川一中GKもPTをよく防いだが、それ以上にGK安達を中心とするディフェンスが堅く、なかなかゴールを割れなかった。

●玉出中（大阪）16―11 河内中

玉出中がいきなり3連取。河内中もセンター芝を中心に必死に臨んだが常に後手に回ってしまった。

■準決勝

●佐伊津中 9―8 矢田中

今大会ナンバーワンゲーム。まさに最初から最後までハンドボールの醍醐味が十分に味わえた。13分までは常に1点を争う状態が続く。矢田中安達、佐伊津中北両GKの好守が続き、館内も大いに盛り上がる。特に安達が佐伊津中のシュートをことごとくキープする間に矢田中の3連取で少しずつ抜け出し、前半を6対4のリードで終了。

後半になるとリズムががらりと変わる。矢田中はパッシブプレー、オーバーステップ、パスミスなどが続き、すっかりリズムを無くしてしまう。逆にゴールには至らないものの佐伊津中の動きが良くなってきた。7分になって佐伊津中・寺のカットインが連続して決まるとついに6対6の同点に追いついた。相変わらず安達の満点キーピングが続くが味方に援護射撃が無い。11分ついに佐伊津中が7対6と逆点に成功。館内のボルテージもクライマックスに達する。13分パスカットから矢田中・前田が速攻を決め再び7対7の同点。矢田中にとって実に18分近くノーゴールの状態が続いていた。続く15分には宮本が決めて、再び矢田中8対7とリード。18分佐伊津中はPTを決め再び8対8の同点。残り30秒佐伊津中は前田がステップを決め9対8。決勝進出ゴールとなった。敗れたとはいえこのゲームの最高殊勲選手はGKの安達であることは万人が認めよう。

●富山選抜 6―5 玉出中

前の試合の興奮が冷めやらぬ中でのスタート。この試合も負けず劣らずの出だしを展開。両チームとも動きながらパスをつなげスピード感溢れる。しかし得点に至らないのは前の試合はノーマークを好捕するなどのミラクルキーピングの連続だったが、この試合はどうも最後のツメが足りない（前の試合を見てしまったせいも多分にはあると思うが）。前半は玉出中4対2富山と両チームともロースコアで終了。

女子優勝の富山選抜

後半も決め手を欠き、膠着状態が続くが6分富山・鏡森の連続シュートで5対4と逆転。9分に玉出中・松本のPTで5対5と再び同点。8分近くノーゴールの状態が続くが富山・辰口のステップが決まり6対5。そのまま終了となった。玉出中は後半のゴールが1点のみというのが痛かった。

■決勝

●富山選抜 19―6 佐伊津中

決勝戦にふさわしく、出だしは両チームともスピード感溢れる。先手は富山。3分に辰口のステップが決まる。次第に富山がペースをつかんでくる。佐伊津中もローリングをしかけるがペースに乗れない、というよりも攻撃がパスをつなげ相手のディフェンスをゆさぶるでなしにミドル1本の単調な攻めになってくる。しかもそのシュートがバーに当たったり、ゴールの外にはずれたりするなどして完全に富山がペースに乗り、前半9対2で終了。後半になっても佐伊津中の前半と同じ攻めが続き、準決勝で見せた粘りが全く見られない。ベンチからもさかんに檄を飛ばすが、コートでは相変わらずのちぐはぐさ。単発に佐伊津中は前田のシュートが決まるだけで終始富山のゲームとなり19対6の思わぬ大差で終了した。

3校から選抜した富山は12月にチーム結成後、神奈川など他県にまで遠征、或いは週末には合宿を重ねるなどでチームとしての一体感に励み、強化に励んできたという。

最後に、出場された皆さんが今後もハンドボールを愛してくれることを願い、我々はジュニア層の拡大をはじめ、競技の繁栄に尽くすとともに、この大会のために御尽力いただきました関係各位に対し、深く感謝致します。（臼井）

第17回日本リーグを振り返って

日本リーグ運営委員会
西村　亮治

平成4年6月6日（土）鈴鹿市立体育館（三重）において、前回7年ぶり8回目の覇者となった大同特殊鋼と一部返り咲きのトヨタ自動車との一戦を皮切りに、全国52会場（内二部集中開催6会場）172試合の幕が切って落とされました。

大同特殊鋼のV2なるか、はたまた勢いに乗る日新製鋼が待ったをかけるのか、また女子は大崎電気のV6なるか、戦国時代の名のとおり予期せぬチームが飛び出すのか、興味津々のシーズンインとなりました。今回から男子一部はプレーオフ制を採用し、通算成績1～3位のチームがプレーオフに出場することとなり、1位争いはもちろんのことプレーオフ出場キップを競う2位、3位争いも大いに注目されました。

【男子一部】

序盤戦快調に飛び出したのは本田技研でした。一方V2を狙う大同特殊鋼は、バルセロナ・オリンピック韓国代表で帰国した林珍錫を欠き、苦戦が予想されていたが、1、2戦とも無難にクリアーするも、3戦目の大崎電気に23－23と引合けとされ、翌日日新製鋼に敗れ、序盤からつまづきV2戦線に黄信号がともりました。一方、緒戦大崎電気に苦杯をなめた湧永製薬は、続く2戦目の日新製鋼に快勝したあと、持ち前の試合巧者ぶりで連勝を続け、前期1位で折り返すこととなった。全日本総合の優勝ですっかり自信をつけた日新製鋼も、安定した試合ぶりで並走し、2位で折り返した。

後期韓国代表から戦列に戻った林（イム）を擁し、巻返しにファンの注目を集めた大同特殊鋼は、後期開幕早々、日新製鋼、湧永製薬に連敗。あっさりとV2戦線から脱落。興味は快調に進撃を続ける湧永製薬と日新製鋼の1位争い、プレーオフの出場権をかけての3位争いに移った。湧永製薬は快調に星を重ね、最終戦の日新製鋼も力でねじ伏せて1位でプレーオフ出場へ進んだ。終盤、中村荷役に苦杯をなめた日新製鋼ではあったが、安定した試合ぶりで2位を保。3位は前期好調の貯金を生かし、下位が星のつぶし合いのなか、うまくすり抜けた本田技研が手にした。

後期終盤、湧永と引合け、大同、日新を破った中村荷役の活躍は特筆され、前期にもこの活躍があれば上位争いがもっともつれたと思われ、ある意味では惜しかったが、次回は大いに期待をもたせる戦いぶりであった。2度目の一部挑戦となったトヨタ自動車は、今回も1勝も挙げることが出来なかったが、着実に力をつけており、二部降格とはなったが捲土重来を期待したい。

個人得点記録も日新製鋼の西山選手が、大同特殊鋼蒲生晴明（現全日本監督）の持つ前人未踏61得点にあと4点とする607得点と追いあげ、来季にその偉業を持ち越すなど、話題の多い今大会だった。

【女子一部】

大崎電気のV6なるかと大いに期待された開幕前であったが、フタを開ければ予想外の展開となった。選手の交代期、金玉花の故障と重なり、緒戦強豪オムロンには終始ペースを握られたまま敗退し、暗雲がたちこめた。金の故障、尹へのマンツーと若い大崎電気の選手にとってはちょっと重荷。前期は大和銀行に1勝したものの、後期に入って主砲の尹が体調不良で欠場を余儀なくされ、決定的な戦力ダウンとなり、リーグ加盟以来初めて二部降格となった。一方で近年着実に地力をつけている北国銀行が、金順徳を軸に快調に進撃。前期5戦全勝で折返した。前期北国銀行に苦杯をなめたオムロンも、その後の戦いは安定した強さを発揮。6年ぶりの女王の座を目指して追走。反面、このところしっかり一部に定着した大和銀行は、大崎電気同様、選手の交代期に当り緒戦から苦戦。前期1勝も挙られず最下位で折返し、後期に期待をかけたが、終盤ようやく調子を上げ大崎電気、ジャスコに2勝したものの5位となり、2年連続で入替え戦へと廻った。3年ぶりに一部に復帰したジャスコは、2戦目シャトレーゼに快勝。大和銀行も破って3勝2敗で折返し、後期は1勝しか挙られなかったものの、4位を確保して入替戦を免がれた。

14回大会6位、15回大会4位と着実に順位を上げているシャトレーゼは、オムロンには2敗したものの、今季好調の北国銀行には1分1敗と健闘し、初めての3位を確保。

優勝の行方は快調にとばすオムロン、北国銀行の2チームに絞られ、最終日最終戦の直接対決の結果次第と、劇的な展開となったが、オムロンの快勝で逆転優勝。6年ぶり7度目の女王の座を射とめた。

女子の展開を振り返ってみれば、外国人選手の活躍の度合いが、そのまま成績の明暗を左右した戦いであったと言って過言ではなさそう。オムロン、北国銀行は明、大崎電気は暗。リーグにとって高度なテクニック、プレーを観客にアピールすることは悪いことではないと確信しているが、女子チーム界の将来にとって一抹の不安を感んじさせる今回のリーグ戦であったように思う。

【男子二部】

快調に進撃したのはトヨタ車体。近年は二部の中堅におさまっていたかに見えたが、予想外の大健闘。あれよあれよと星を重ね、後期中盤には早くも1位を決め、初の一部昇格を手にした。トヨタ車体についで快進撃を続けたのが、リーグ加盟4年目の日本電装。初の入替戦出場かと色めきたったが、肝心のところで取りこぼし若さを暴露。一方、新進気鋭の北陸電力に2敗、トヨタ車体に2敗と息をひそめていた三景は、さすがに試合巧者ぶりを発揮。スルスルと2位へ駆け込み、入替戦のキップを手

第17回　日本ハンドボールリーグ結果

男子	大同	日新	本田	湧永	大崎	中村	三陽	トヨ自	勝	負	分	勝点	得点/失点	差	順位
大同特殊鋼		●24—28 ●21—27	●19—20 ○26—18	●27—29 ●20—23	△23—23 ○29—21	○25—21 ●20—22	○35—23 ○30—22	○30—27 ○31—24	7	6	1	15	360 328	32	4
日新製鋼	○28—24 ○27—21		○28—21 ○30—26	●24—31 ●20—34	○28—25 ○26—20	○27—24 ●26—30	○33—32 ○29—27	○40—22 ○34—24	11	3	0	22	400 361	39	2
本田技研	○20—19 ●18—26	●21—28 ●26—30		●24—26 ●22—26	○24—14 ○20—18	○23—21 ○23—20	○29—20 ○21—17	○29—22 ○28—25	9	5	0	18	328 312	16	3
湧永製薬	○29—27 ○23—20	○31—24 ○34—20	○26—24 ○26—22		●26—28 ○29—19	○31—18 △25—25	○27—23 ○24—18	○30—24 ○30—18	12	1	1	25	391 310	81	1
大崎電気	△23—23 ●21—29	●25—28 ●20—26	●14—24 ●18—20	○28—26 ●19—29		○23—20 ○31—17	○29—28 ○23—20	○48—24 ○25—21	7	6	1	15	347 335	12	5
中村荷役	●21—25 ○22—20	●24—27 ○30—26	●21—23 ●20—23	●18—31 △25—25	●20—23 ●17—31		○30—25 ○25—24	○40—30 ○36—19	6	7	1	13	349 352	－3	6
三陽商会	●23—35 ●22—30	●32—33 ●27—29	●20—29 ●17—21	●23—27 ●18—24	●28—29 ●20—23	●25—30 ●24—25		○33—25 ○27—20	2	12	0	4	339 380	－41	7
トヨタ自動車	●27—30 ●24—31	●22—40 ●24—34	●22—29 ●25—28	●24—30 ●18—30	●24—48 ●21—25	●30—40 ●19—36	●25—33 ●20—27		0	14	0	0	325 461	－136	8

女子	大崎	オムロ	北国	シャトレ	大和	ジャスコ	勝	負	分	勝点	得点/失点	差	順位
大崎電気		●22—28 ●13—34	●28—36 ●16—34	●22—26 ●14—29	○25—20 ●20—24	●31—34 ●26—29	1	9	0	2	217 294	－77	6
オムロン	○28—22 ○34—13		●26—27 ○26—21	○22—17 ○24—22	○28—24 ○36—20	○21—17 ○37—21	9	1	0	18	282 204	78	1
北国銀行	○36—28 ○34—16	○27—26 ●21—26		○26—24 △23—23	○36—35 ○32—15	○31—28 ○39—20	8	1	1	17	305 241	64	2
シャトレーゼ	○26—22 ○29—14	●17—22 ●22—24	●24—26 △23—23		○25—16 ○23—20	●17—26 ○30—20	5	4	1	11	236 213	23	3
大和銀行	●20—25 ○24—20	●24—28 ●20—36	●35—36 ●15—32	●16—25 ●20—23		●21—34 ○26—22	2	8	0	4	221 281	－60	5
ジャスコ	○34—31 ○29—26	●17—21 ●21—37	●28—31 ●20—39	○26—17 ●20—30	○34—21 ●22—26		4	6	0	8	251 279	－28	4

にした。リーグ新加盟の北陸電力は、必死の戦いぶりで5位を確保。初陣にしては立派であった。

【女子二部】

一部との力の差はないと言われていた日立栃木、ブラザー工業を軸に、進境著しいＪＵＫＩ、ソニー国分がどうからむかが戦前の予想であったが、日立栃木は予想通りの快進撃で互角と言われたブラザー工業さえも全く寄せつけず、安定した強さで1位確保。入替戦出場キップ残り1枚をブラザー工業、ＪＵＫＩで争う展開となり、先勝しているＪＵＫＩに9点差以上で勝たなければならないブラザー工業は、直接対決で何んと14点の大差をつけて逆転、入替戦のキップを手にした。常連のムネカタ、リーグへ復帰した日本ビクターはさらなる精進が望まれる。

【プレーオフ】

今回初めて採用され、リーグ通算1～3位のチームが出場。まず2位（日新製鋼）と3位（本田技研）が対戦。その勝者が1位（湧永製薬）と対戦しリーグの覇者を決める、いわゆるステップラダー方式で東京代々木体育館で行った。準決勝は日新製鋼がスピードで本田技研を圧倒し、後半ミスを重ねる本田技研を一方的に破って決勝へ。決勝戦は見ごたえのある緊迫したゲーム展開となり、後半残り5分で19－19と同点に追いついた日新製鋼が勢いでなだれ込むかと思わせたが、さすがは湧永製薬、中山、玉村、荷川取らの活躍で一気に突き離し2年ぶり7回目の優勝を果した。

【入場者数】

ここ数年の入場者数の減を先回第16回大会で歯止めがかかり、今回はさらに前年対比16％アップと完全に歯止めがかかったと見て良いと思われる。第18回大会では1会場当り1500～1600人の入場者を目指し、観客動員アップの指導を行って行きたいと考えている。

第18回大会は6月1日、東京都体育館を皮切りに、11月28日、東京都体育館でのプレーオフまで、さらにエキサイティングなゲームを全国各地でご披露いたします。

入場者数

	会場数	入場者数	前年比	1会場数	前年比
前期	22会場	29,308人	＋22％	1332人	＋22％
後期	26会場	37,873人	＋11％	1457人	△9％
通算	48会場	67,181人	＋16％	1400人	＋4％

日本リーグ・プレーオフ

プレーオフを制した湧永製薬

湧永が2年ぶり7度目の優勝

史上初の日本リーグ・男子プレーオフが、3月12・14日の二日間、東京・国立代々木第一競技場にて開催された。

この大会を盛り上げるために、人気タレントであり、ハンドボール選手としてインターハイや国体にも出場経験があるそのまんま東氏をスペシャルゲストとして招いた。前日の11日には前座試合として同氏が登場し、高校当時そのままの情熱一杯に加え、ユーモア溢れたプレーで大いに館内を沸かせた。

その後、近くのホテルで前夜祭パーティーが引き続き行われ、テレビ朝日の渡辺信嗣アナウンサーやタレントの蓮舫さんも元ハンドボーラーであったなどという「事実」を知り、なごやかなうちにもプレーオフに向けて熱き戦いが始まろうとしていた。

今回はリーグ戦2位の日新製鋼と3位の本田技研の勝者が1位の湧永製薬と対戦する方式が採られた。

日新製鋼対本田技研

湧永製薬と対戦するチームを決めるこの一戦。日新は45度に木村と坂口、センターに林、サイドに池田と源内、ポストに堀田、GKは宇田川、ディフェンスには野中が林と交代。対する本田は45度に丹羽と福村、センターに平松、サイドに弥吉と関根、ポストに梅基、GKは橋本、ディフェンスには藤井が平松と交代といったスタメンで始まった。

出だしは両チームとも動きに硬さが見られる。先手を取ったのは日新。2分30秒にサイドへ流れての池田のシュート、次いで堀田のPTが決まり試合の主導権を握りかけようとした。本田はキャプテンの山村がリーグ戦で負傷し戦線離脱したのが尾をひいているのか、なかなか本来の切れが見られない。相次いで警告、退場を重ね、消極的になっている。15分に3対3の同点に追いついたものの直後に木村の連続シュートなどがあり6対3にされてからは互いに点の取り合いとなり、11対8の日新3点リードで前半を終了した。後半開始からの5分間にこの試合大活躍の木村の2点を含む4連取で一気に本田を突き放した。本田もこのまま引き下がる訳にも行かず、肩を負傷しているGK橋本にやっと速

攻のボール出しがあったが不発。この後何本か速攻を企てるがいずれも失敗に終わり、以降本田は単発的な得点となり、20対12の大差がついたところで、日新は湧永との決戦に備えてGK宇田川をベンチに下げ、若手の篠原にチェンジし、25対17の意外な大差で終了した。

本田はリーグ後期の歯切れが悪い戦いが続いた上、山村、GK橋本と主力の相次ぐ負傷も重なり、最悪の状態でこのプレーオフに挑んでしまったようだ。

湧永製薬対日新製鋼

昨年6月に始まった第17回日本リーグもいよいよ大詰め。半月前のリーグ最終戦では34対20という湧永の圧勝に終わったが、念願のリーグ初優勝に燃える日新と前回は史上最低の4位という屈辱を味わった湧永の一戦は試合前から両チームとも気合十分。が、しかし日新は守護神の宇田川が本田との試合で足を負傷しており、アップを行わない。

果たして試合が始まった。日新は本田戦と全く同じスタメン、湧永は45度に玉村と中山、センターに酒巻、サイドに河原と堀田、ポストに田中、GKに河野、ディフェンスは荷川取と高田が玉村、中山とチェンジ。

河原の連続シュートで湧永が先手を取る。試合後の井藤監督の談話にもあったように、私生活を犠牲にしてまでも練習に励んで来た闘志が、開始早々の主導権を握ったようだ。だが、日新も本田戦に6点をあげた若大将の源内が負けじとサイドからのシュート。源内が決めれば湧永はベテランエースの玉村も連続PTとムードを盛り上げる。対する日新はキャプテン武田がポストシュートなどで踏んばる。優勝を決定するに値する見ごたえのある攻防が続く。常に先手で進んだ湧永が12対8とリードで前半終了。4点のアヘッドを背負って後半を向かえたのは昨年暮れの全日本総合と同じだが、その時とはどこかムードが違う今日の日新。後半に入り、リリーフエースの西山が登場。だが西山も1週間程前に肉離れをおこして万全とは程遠い。いきなり2分間の退場にあう。その間、湧永は若きエースの中山がセンターからロングを炸裂させる。その後両チームのGKの好守が相次ぎ館内は大いに盛り上がる。15分過ぎここまでゴールを死守してきた宇田川がベンチに下がり篠原とチェンジ。このあたりから奮起した日新の猛反撃が始まり、25分についに19対19の同点となり、館内の興奮もクライマックスに達する。だがここまでが精一杯なのか、直後に中山のシュートが決まると、この試合を最後に引退する荷川取のポストシュートなどで日新の息の根をとめてしまう。最後は新井のPTで25対21、湧永の2年振り7度目の優勝となった。

今回初めて採用されたプレーオフ。人気タレントを起用したり、数々の企画で盛り上げようとした関係者の努力がこれからのハンドボールの発展に繋がるよう、深く願わずにはいられません。

(臼井)

プレーオフを最後に引退した荷川取選手

日本リーグMVPに輝いた玉村選手

岩手県ハンドボール協会

岩手県ハンドボール協会は、昭和24年に箱崎敬吉現会長によって競技が本格的に導入され、同年9月に発足しました。平成5年には協会発足後45年が経過しようとしています。この間、会長、理事長ともに4代目となっております。その間、昭和41年の全国高校総体や45年の岩手国体の全国大会をはじめ、ユーゴスラビアとの国際親善試合や東日本インカレ、また日本リーグの大会運営等、実績があり、平成11年には岩手インターハイが予定されております。

現在の登録チーム数は、一般23チーム、大学、高専6チーム、高校47チームと東北では第2位の登録チーム数です。このほかに中学校も県大会に男女33チームが参加し、底辺がますます膨らみを見せているところです。

国際大会選手としては、菊池、首藤のオリンピック代表をはじめ、男子で北村、女子では山田、三浦の世界選手権代表がおります。

全国大会等の実績では、高校女子の花巻南が昭和41年の盛岡インターハイで準優勝し、翌42年に初優勝の輝かしい実績があります。男子では盛岡一高、一般男女の岩手教員チームが全国大会優勝等、上位進出の戦績があります。

平成4年度は山形べにばな国体が成功裏に終了し、7年には福島国体が予定されるなど、東北各県で強化が進むなか、当県でも、平成11年に向けて各種強化策が進行中であります。

まず、平成4年度より、県教育委員会主催によるジュニア強化対策事業として、5泊6日の日程で前期・後期の年2回、中学生と高校生の強化指定選手男女各20名ずつによる合同の強化合宿を実施しております。

高体連においても、平成11年をにらんで強化策がスタートし、関東方面への強化遠征、合宿はもちろん、平成5年度中に海外遠征（韓国）の実施が決定するなど、長期的な強化策が次々打ち出されています。

平成4年度では、長年の強化が実り、東北ミニ国体において総合優勝を飾り、少年男子以外の4種別が国体出場を果しました。また、先日行われた全国選抜大会東北予選会においては、男子の盛岡一高、女子の盛岡二高がアベック優勝を県勢として初めて果しました。インターハイにおいても盛岡二高が2年連続でベスト16に進出しており、更に上位が期待されます。

指導陣も、若手の指導者が次々と増え、競技力向上はもとより、上級審判の育成など、競技運営面でも今後に明るい見通しがあります。

最後に、岩手県ハンドボール協会は、箱崎会長のもと、一枚岩の精神でこれからも日本ハンドボール協会の発展を願い、普及・強化にむけて一層努力を重ねて参る所存ですので、今後とも日本協会並びに皆様方のご支援、ご協力を心からお願い申し上げます。

和歌山県ハンドボール協会

本県のハンドボールは、昭和23年、高校男女9校が加盟して始まりました。数こそ少なかったが、第3回の国民体育大会や、第1回のインターハイ等数多くの大会に出場しました。

高校を中心に始まりましたが、発足当時から活動していた和歌山師範の卒業生達が中学校に普及させました。24年から那賀郡を中心に、中学校大会や、県大会も開催されるようになり、近畿中学校総体にも出場するようになりました。又、高校のＯＢ達によって一般のチームも増えていきました。

昭和30年には、規約や役員構成が確立し、34年には近畿高校選手権大会を開催できるまでに協会の組織が固まってきました。高校が全国レベルになり、一般が国体、全日本総合等に出場できるようになってきたのもこの頃です。その一方で、中学校の体育の教材からハンドボールが消えたことは、この後の発展に大きな障害となりました。

昭和42年に第18回全日本高校選手権大会、45年に第22回全日本総合選手権大会、46年に第26回国民体育大会を開催でき、充実していきました。同時に国体以後、教員チームの選手達が各地で熱心に指導にあたったことで著しく、競技力の向上と普及が見られました。

現在は、春季選手権、秋季選手権、室内選手権の三大会を中心にブロック大会、県予選会等を開催しています。特に秋季選手権はお祭り的な大会として、小学生、中学、高校、高専、大学、一般と全種別約65チームが一同につどい行っています。

しかし、普及していく反面、種別や地域の片寄りが目立つようになって来ました。紀北地区（那賀郡中心）は、中学や高校のチームが多いが一般が少なく、和歌山市地区は、一般や高校男子が多いが高校女子が少なく、中学女子は一校もありません。紀中地区（有田郡、海南市、御坊市中心）も、全種別共女子のチームが少ないです。紀南地区には、御坊市から150kmも離れた新宮市に高校のチームがあるだけです。特に、北の橋本市から南の新宮市まで250kmもあり、大会を開催すれば、宿泊を必要とするチームが出てきます。

このようなことを少しでも解消させるため、郡市協会の設立を目指しています。地区大会を発展させることによって、だれもが気軽に参加できるようなハンドボールを目指したいと思っています。

『オリンピック・ファミリー義援募金』報告

2月号の機関誌誌上で日本オリンピック委員会主催の『オリンピック・ファミリー義援募金』についてのご協力をお願い致しましたところ、皆様方のご理解とご協力により多くの成果を上げることが出来ました。3月15日までの各種大会会場における募金総額は448,302円となり、全額を日本オリンピック協会に納金致しました。皆様方のご協力に深く感謝申し上げます。

新理事会

3月13日　於　岸記念体育館会議室
出席　渡邊副会長、中沢専務理事他13名、参事6名

1.理事会に先立ち役員会を開催、9ブロックより3名、5連盟より3名の理事を選出。先に評議員会において選出された14名を加えて20名の理事が決定した。

理事会では会長、副会長、以下の役職および職務分掌を決定した（詳細別掲）。

任期は平成5年3月13日から平成7年3月31日までとする。

2.第1回日中韓ジュニア交流競技会（従来の日韓ジュニアに代るもの）は平成5年8月25～30日に福島県郡山市に於いて開催。

3.平成6年度全日本総合選手権大会は平成6年12月22～25日開催を目標に東京体育館の使用を申し込む。

（財）日本ハンドボール協会編
『ハンドボール』
第三三〇号
昭和四十年六月七日第三種郵便物認可
平成五年三月二十六日印刷
平成五年五月一日発行
東京都渋谷区神南一ー一ー一
電話 代表 三四八一ー二三六一
振替 東京 六ー五八三ー四八番
編集兼発行人 中澤重夫
定価三百五拾円
（年間購読料三千三百円）